

山村の婦人労働と生活構造〔I〕

九州大学農学部 瓜 生 恵美子

1. はじめに

山村農家の婦人がどのような生活をしているかを把握し、その労働条件や生活環境の改善の方策を探ることは、過疎化しつつある山村の振興を図る上に重要である。しかし一口に山村といってもその立地条件や産業構造に差異があるので、それらを類型化し、次の地域、すなわち椎茸で有名な宮崎県諸塚村、すぎ林業で有名な大分県上津江村、都市近郊に位置する福岡県篠栗町、ミカン栽培を中心とする同県糸島町から調査農家を選定して、山村婦人の生活実態の究明を試みた。なお、今回は前2地域について分析することにした。

2. 宮崎県諸塚村の椎茸栽培と婦人労働

諸塚村は東臼杵郡の西南部、耳川の上流に位置し、海岸線まで約48kmの位置にある。総面積は19千haと大きい、農耕地は僅か約300ha(1.6%)、しかも山岳の傾斜を利用した畑地が60%で、水田は谷底にある湧水を利用した冷水田が多く、林野が総面積の93%をしめる典型的な山村である。

表1 諸塚村の年次別人工造林面積の推移

年度	すぎ	ひのき	あかまつ	くぬぎ
40	363	69	7	43
41	281	45	1	54
42	352	91	—	63
43	546	171	3	111
44	421	109	1	76
45	361	214	—	55
46	330	219	2	98
47	257	163	—	105
48	194	81	—	79
49	150	103	—	79
50	139	81	—	83
51	176	59	—	68
計	3570	1405	14	914
%	60.5	23.8	0.2	15.5

注、耳川地域森林計画書による

この村の専・兼業別をみると専業は少なく、ほとんど1種または2種兼業である。1種兼業では、林業を自営する農家が30.2%を占める。また農産物販売農家のうち年間100万円以上の農家は32%で、主として椎茸栽培農家である。

山林の保有をみると5ha以上の農家は全農家の72.5%、平均保有山林は15.6haに及んでいる。この保有山林の人工造林面積は表1のようで、スギ、ヒノキ、アカマツの人工造林が主体であるが、見おとすことができないのはクヌギの人工造林である。椎茸原木は肥培林1ha当り12年生で60m³を得るとされているので、椎茸栽培のための原木入手が、ほぼ保有山林によってまかなわれるといえる。もちろん保有山林の少ない農家や、椎茸栽培の経営規模の大きな農家では、公有林の払下げや、他村から原木を求めることもある。

諸塚村の椎茸生産は、第1に気象条件に適していたこと。第2に原木条件に恵まれていたこと。第3に椎茸以外に商品作物がなく、労働の競合が少なかったこと。第4に、椎茸の鉦目式の自然栽培法が農家にも定着していたこと。また国道327号線や県道が自動車道として利用できるようになったのは戦後であり、このため商人資本の投資の対象とならず、戦前からの焼畑農業で活用していた林地を椎茸原林木として転換していったことなど。いくつかの好条件により諸塚村での椎茸生産の基礎が出来たといえよう。

実態調査を行なった荒谷部落のA農家では、労働力3.5人、経営農地13a、畑18a、茶園4a、個人有林15.2ha、うち人工林スギ5ha、クヌギ5ha、天然林5haを保有し、その他分収林4haがある。椎茸栽培は毎年約30,000~40,000コマ分のホダ木を導入し、53年度では約250万円の販売額であった。椎茸生産設備は薪による固定棚による乾燥室であったが、42年からは回転式の乾燥機、50年より自動乾燥機を導入した。またドリルは10年前より、集材機は53年より7人共同で、チェーンソーは42年、ホダ場のスプリンクラーは52年に2ヶ所導入した。また、トラックは道路が開通した42年より導入している。このような設備の導入により椎茸栽培労力が大きく軽減されることとなった。ホダ場は9ヶ所あり、うち5ヶ所は車が利用できる。

婦人の労働は、主として収穫、乾燥、選別であるが

採取後自動乾燥機に入れ、約12時間で90%の乾燥、その後回転式乾燥機で仕上げを行なっている。乾燥は以前のような労力を必要としなくなったが、選別は夜間行なっている。A 家の場合経営耕地が少ないが、耕作は主として婦人にまかされており、また子取り用和牛1頭も婦人の仕事である。しかも椎茸生産と農作業は重複しない形で行われている。

またB 家では労働3人、水田 35 a、畑 2 a、茶園 25 a、保有山林21.7ha、うち人工林15ha、クヌギ3 ha（昭和36年植付）、天然林3 ha、分取林 3.5haがある。椎茸栽培は48年から毎年10万コマを打ちこみ、春子 360万円、秋子で42万円の販売額であった。39年より回転式、52年より自動乾燥機、集材機は40年に軽架線（第1次林構）、50年より部落共有で設置した。トラックは47年より購入。ホダ木は5人共同で美々津で山を買い、現場に伏せ込み、ホダ起し後車で持ち帰る。ホダ場は2カ所である。生産労働は伐採、玉切、接種、ふせこみ、採取、乾燥にいたるまで、夫婦の労働と玉切り、ふせこみまで20人日、ホダ場までの運搬に4.5人日、採取は20人日の雇用をしている。婦人はその他に水田や自給畑作、茶の生葉生産を行なっている。

3. 大分県上津江村の婦人労働

上津江村は筑後川の支流津江川の上流に位置し、西は熊本県菊池市、南は熊本県阿蘇郡南小国町および小国町、東は大分県日田郡中津江村と境している。日田市まで国道 387号線をバスで約1時間、日田郡中でも日田より最遠距離の村である。総面積は 8,764ha、農耕地 265haで（2%）起伏した山岳と河川との間に段丘状に散在し、平坦地は殆んどない。林野が総面積の95.2%を占める山村である。

上津江村の総農家数は295戸であるが、その76%が2種兼業農家で、しかも不安定な日雇賃労働が圧倒的に多い。1種兼業は19%で、うち林業の自営は約半数を占める。農産物販売農家のうち年間 100万円以上の農家は6%しかない。経営耕地も1ha以上が5%で、農業のみでは生活出来ない状況である。

表2 保有規模別林家数及び保有山林面積

規 模	総 数	1ha未満	1—3	3—5	5—10	10—20	20—30	30—50	50—100	100ha以上
林 家 数	606	229	151	46	73	61	13	12	12	9
面 積	5,870	94	269	182	501	892	316	414	923	2,279
1戸当り平均	9.7	0.4	3	4	7	15	24	35	77	253

大分県：日田・玖珠地域森林計画概要書より作製、

上津江村の山林所有の特徴は表2の如く、50ha以上の大山林地主が過半の山林を所有していることであり、その殆んどがスギの人工林である。しかし現在では新植、保育は少く、山林経営の方向として大径木生産へ移行しているため、林業賃労働の機会が少なくなっている。

調査した浦部落のC家は29aの水田と5aの畑と5aの保有山林と1haの分取林を有する農家である。52才の世帯主は、6人で組を作り、年間 200日林業賃労働に出ており、月約10万円の収入を得ている。妻は日田市の土木業者の日雇で、村内の婦人たちとともに業者のマイクロバス利用によって福岡市方面まで働きに出ている（業者は日田市内）。

D家は、耕地も山林もない分家であるが、主人は数年前までは伐採の組で林業賃労働をしていたが、通年雇用でないため収入が安定せず、中津江村のボーリング会社に転職した。妻は小国町の縫製工場で月6万円足らずの賃金を得るため朝早くから働いている。

この村では、以上のように農業経営も耕地に恵まれず、その上村内での林業賃労働の場が少ない。このため男子の働き手は組を作って間伐材の伐木・搬出労働として大山林地主に雇われているが、雇用の機会は少ない。婦人を含めた働き手は、他町村に雇用の場を求めているものが少なくない。

4. おわりに

諸塚村では、椎茸栽培の機械化など生産過程の近代化によって生産が飛躍的に伸び、単一家族による経営が安定している。婦人は椎茸栽培の基幹的地位を占め、生産の主要な担い手として安定している。

上津江村では男子は伐木、搬出作業に従事しているが、婦人の労働力は一般土木作業へ流れ、農繁期を除き家庭には基幹労働力がない。このため近年村当局としては、木材加工業、生椎茸生産、キュウリ栽培を導入し、村内での労働力の燃焼を計っている。

以上のように山村農家の婦人労働は山村地域の産業構造と農家の経営形態に規定されている事がわかる。